

4 母音変異複数

foot に対して *feet*, *mouse* に対して *mice* のような「不規則変化」を示す名詞の複数形の由来を示す。Sapir (1921: 174) によれば、英語の *foot*, *feet*, *mouse*, *mice* は初期の西ゲルマン祖語の *fot, *foti, *mus, *musi に由来し、強勢は第1音節に置かれ、第1音節の母音は長母音である。母音を音声記号で表すと、*f[ó:t], *f[ó:t]-[i], *m[ú:s], *m[ú:s]-[i] である。現代英語では、それぞれ、f[ó:t], f[í:t], m[á:s], m[ái:s] と発音される。

feet の母音は [ó:] から [í:] へ、*mice* の母音は [ú:] から [ái] へ変化した。この変化に関与したのは、(1) 硬口蓋音性 (palatality) の同化、(2) 硬口蓋母音の弱化、(3) 弱化した硬口蓋母音の消失、(4) 硬口蓋唇母音の脱唇音化の4つの音の置き換えと **大母音推移 (Great Vowel Shift)** である。いずれにおいても、強勢が重要な役割を果たしている。*feet* の母音の由来は、[ó:]- (1) → [ó:]- (2) → [ó:]- (3) → [ó:]- (4) → [é:]- 大母音推移 → [í:] である。また、*mice* の母音の由来は、[ú:]- (1) → [ý:]- (2) → [ý:]- (3) → [ý:]- (4) → [í:]- 大母音推移 → [ái] である。強勢を軸として、それぞれの音の置き換え、大母音推移を見ていくことにする。

(1) f[ó:t]-[i] は f[ó:t]-[i] へ、また、m[ú:s]-[i] は m[ý:s]-[i] へ置き換わる。

関与している音韻過程は、**硬口蓋音性の同化 (palatal umlaut)** である。強勢から次の強勢までのまとまりがビートである。この例では語という単位が1ビートである。*f[ó:t], *f[ó:t]-[i], *m[ú:s], *m[ú:s]-[i]、それぞれは1ビートで発音される。この例ではビートが同化の領域である。同じビート内で後ろにくる母音が硬口蓋母音の時、前にくる母音は硬口蓋母音になる。つまり、硬口蓋音性の逆行同化である。調音の仕方は、前にくる母音に硬口蓋音性が加わるので、[ó:] および、[ú:] を発音しながら舌全体を前に動かすと、それぞれ、[ó:], [ý:] という硬口蓋唇母音が発音される。

(2) f[ó:t]-[i] は f[ó:t]-[ə] へ、また、m[ý:s]-[i] は m[ý:s]-[ə] へ置き換わる。

関与している音韻過程は、硬口蓋母音の弱化である。強勢を受けていない硬口蓋母音は、硬口蓋性を失い硬口蓋母音でなくなる。f[ó:t]-[i] および m[ý:s]-[i] は、それぞれ、1ビートで発音される。前にくる母音が強勢を受けるため長く、全体が1ビートなので、後ろにくる母音はその分短くなる。長さの比は約3:1。無強勢母音に割り振られる時間は極めて短い。硬口蓋音性といった明確な音色を出すための調音（舌全体を前に動かす）に十分な時間がかけられないため、/i/ を発音しようとしても、明確な音色を持たない [ə] が発音される。

(3) $f[\theta:]t$ -[ə] は $f[\theta:]t$ へ、また、 $m[\bar{y}:]s$ -[ə] は $m[\bar{y}:]s$ へ置き換わる。

関与している音韻過程は、弱化した非硬口蓋母音 [ə] の消失である。強勢を受けていないことで硬口蓋性を失い、硬口蓋母音ではなくなつた母音は消失する。

(4) $f[\theta:]t$ は $f[\bar{e}:]t$ へ、また、 $m[\bar{y}:]s$ は $m[\bar{i}:]s$ へ置き換わる。

関与している音韻過程は、硬口蓋唇母音の脱唇音化=非円唇化である。硬口蓋唇母音は唇音性を失う。硬口蓋音性と唇音性の関係は、相手の音響的効果を弱めてしまうという相反する関係である（舌全体を前方に動かし、前舌面を硬口蓋に近づけると口腔の前側の大きさが減少する。一方、唇を丸めると口腔の大きさが増大する）。それゆえ、硬口蓋音性と唇音性の両方を備えた母音、例えば、[y] は硬口蓋音性を取り除き [u] に置き換えられたり、または、[y] は唇音性を取り除き [i] に置き換えられたりすることが多い。この例では唇音性を取り除いている。調音の仕方は、[ə:] および [y:] を発音しながら唇の丸めを取り去ると、それぞれ、[e:], [i:] という硬口蓋母音が発音される。Sapir (1921: 175-176) によれば、 $m[\bar{y}:]s$ から $m[\bar{i}:]s$ への脱唇音化はおよそ 1050 年から 1100 年の間に起こり、 $f[\theta:]t$ から $f[\bar{e}:]t$ への脱唇音化よりも数世紀遅れて起こったとのことである。

$f[\bar{e}:]t$ が $f[\bar{i}:]t$ と、 $m[\bar{i}:]s$ が $m[\bar{a}\bar{i}]s$ と現代英語で発音されるようになるまでには、1400 年代にはじまり 1600 年代に完了した大母音推移の一連の音の置き換えが関与している。 $[æ] \rightarrow [e] \rightarrow [i] (= [ii]) \rightarrow [i] \rightarrow [e] \rightarrow [ɛ] \rightarrow [ɛi] \rightarrow [ai] \rightarrow [aɪ] \rightarrow [aɪ]$ である。これらは強勢を受けた母音にのみ生じた。 $f[\bar{e}:]t$ から $f[\bar{i}:]t$ へは ① が、 $m[\bar{i}:]s$ から $m[\bar{a}\bar{i}]s$ へは ②、③、④、⑤ が関与している（大母音推移については、「Canadian Raising と大母音推移」の項を参照）。

表 母音の音声記号と素性

	Palatal	Palatal			Non-Palatal		
	Labial	Non-Labial			Labial		
High	y	i	I	ɪ	v	u	
Mid	ə	e	ɛ	ʌ	ɔ	o	
Low	æ	æ	a	ɑ		ɒ	
	Tense	Tense			Lax		Tense

(宇佐美 文雄)